

歯はいた地じぞうぞう（下野田町）

下野田しものだのむかしの街道かいどうだった細い道ほそみち沿いに、竹やぶを背せにした大きなお地じぞう様さまが北向きたむかきにまつられています。このお地じぞう様さまを村むらの人ひとたちは歯はいた地じぞうとも川崎地かわさきぞうとも呼こんでいます。

むかしむかしのことです。子どもが、

「おつ母おつか、歯はがいてえ、歯はがいてえ」

と泣なきわめいたので、おつ母おつかは井戸いどの水みずでひやししたり、畑はたけからねぎをとってきて口くちにふくませたりしました。また医者いせいいらすの葉はをうすく切きって、いたむところにはつたりもしましたが、子どもはいたがつて一日いちにち中ちゆう泣なきどおしで、どうすることもできませんでした。

子どもは泣なきつかれて、おつ母おつかのひざの上うへでうとうと。おつ母おつかもつかれて、子どもをだいたまま



うとうとしていると、ゆめの中で、

「かわいそうに。あの下野田しものだのお地じぞう様さまにお願ねがいしなはいのう。真夜中まよなかに、だれにも見みられんようにしての。いった黒豆くろまめを三つみつぶ持もって行ってべと（土つち）の中に埋うめ、歯はいたを止とめておくんなはいと、お願ねがいしてきなはいの。」

とおつげがありました。子どもこどもの泣なき声こゑで、はっと目めが覚さめたおつ母おつかは、

さっそく言われたとおりに、いった黒豆をべとに埋め、

「お地ぞうさま、どうかこの豆の芽がでるまでは

歯がいとうならんように。」

と熱心に何度もおがみしました。

そしたら、不思議なことに、いつの間にかいた

みもはれもケロリとなおってしまいました。

うわさは、だんだん村中に広がって、その後

真夜中に、いった黒豆を三つぶもって、お地ぞう

様におまいりする人がたくさんあったということです。

です。

医学の発達した今日でも、お地ぞう様は、あの

世とこの世のさかいに立って、困ったときの身が

わりになって助けて下さるものと信じられ、今で

もお供物や、きれいなお花をかざって、熱心にお

まいりしている村の人たちの姿が見られます。

